

伝えたい
残したい
わがまちの
誇り



ふるさと 情景

VOLUME

21

川上地区
(観心寺の節分星祭)



節

分の豆まきに欠かせない鬼。
一説によると、平安時代における節分の鬼は、まじないによって悪霊や厄を追ひ払う存在でした。しかし、次第に厄の象徴として追われる対象となり、今に至るとされています。なお、豆をまくのは15世紀前半からの風習といわれています。

毎

年2月3日に開かれる観心寺の節分星祭では、豆と同時にくじの入った餅もまかれます。餅は、寺の関係者や檀家の人々によって二石(約360粒)準備され、これを目当てに多くの参拝客が集まり、境内は熱気に包まれます。なかには獲得した餅や景品を見せ合う姿も。

娯

楽の意味も強まった現代の豆まきに鬼は出ませんが、境内を駆け回って体は温まり、家族や友人と連れ立って出かけることで親睦も深まります。時代とともにその姿を変えてきた節分。このような風景も、昔とは違った形での「厄除け」といえるかもしれません。



1開始の合図で、やぐらと建掛塔から一斉に豆と餅がまかれる2福豆を購入するくじ引きも3餅を手笑顔の子どもたち4この日も多くの餅が用意された

※観心寺へは河内長野駅から南海バス「観心寺」下車すぐ。

ふるさと のひと

辻元 喜之治さん

節分星祭には60年以上前から関わっています。当時は、各自が持ち寄った杓と臼で餅をつき、参拝客には子どもが多いなど、今とは違う部分もたくさんありました。一方で、昔からのなじみの人と一緒に節分の準備に参加し、参拝客でにぎわう境内を見ると、変わらない風景が広がっているなど感じます。長く続く行事には世代交代がつきものですが、後継の人々にも手伝いの役割と同時にこの風景を守っていくしてほしいものです。

